法蔵教学に於ける始教と終教

――『五教章』と『探玄記』の相違をめぐって――

赤尾栄慶

はじめに

中国の華厳学は賢首大師法蔵（六四三～七一二）によって大成された。彼の立教開宗の書ともいうべき『華厳一乗教義分斉章』には、その題号[1]の示すように「華厳一乗」の教義が精緻に論述されている。また一方、この書が『華厳五教章』という題号を有していることにも注目しなければならない。周知のごとく、この題号の中の「五教」とは「五教十宗判」の五教を指している。このことは『華厳一乗教義分斉章』が華厳学派の教判である五教判と密接な関係を有していることを物語っている。特に全体の二分の一を占める「所詮差別」などは五教の観点より教理研究がなされている。すなわち『華厳五教章』（以下はこの書名を用い、『五教章』と略称する）という題号は、華厳一乗の教義が五教の立場から明らかにされたことにあるといえる。

さて、インドよりもたらされた仏教が中国に於て華開き頂点を極めた時期は唐代である。しかし、隋代までの仏教研究の成果を継承した初唐の仏教は一つの重大な教説に直面することとなった。それは貞観十九年（六四五）に帰朝した玄奘（六〇二～六六四）によって新訳仏教が確立され、その弟子である慈恩大師基（六三二～六八二）などの学匠によって唯識法相教学が打ち立てられたことである。緻密な心識説と五性各別説とを中心的な課題とするこの教学は、その当時の中国仏教界に大きな波紋を投げかけて一世を風靡する存在となっていったのである。当然のことながら、他の学匠達にとってはこの教学が無視できない存在となり、同時代の華厳学派内に於ても

「新訳」「唯識法相教学」が研究され受容されるのである。これは既に法蔵の師である至相大師智儼(六〇二～六六八)の『華厳五十要問答』や『華厳孔目章』に於て見られる。智儼は新来の唯識法相教学を全仏教上どのように位置づけるかを検討し、その上で大乗初教(＝大乗始教)としての位を与えたのである。[2] 彼の学問的業績を受けつつ、教判及び教義の両面に整理検討を加えた法蔵に於ては五教判が明確に打ち出されている。もはや法蔵の華厳教学の組織は、小乗教・大乗始教・大乗終教・頓教・円教という五教の立場を離れてそれを扱うことができなくなっている。ところが法蔵の多くの著作の中でも双璧をなすと考えられる『五教章』と『探玄記』―所謂「五教十宗判」を説くのはこの二書である―に於ては、始教と終教との判定規準及び位置づけが異なっているのである。一般に中国の学匠達の教判は諸経論の教説の体系化・組織化を図りながら自己の信奉する教の教義的立場を明示することにあるといえる。ある意味で教判は学匠達各々の仏教全般に対する総合的な見解を端的に表現しているといえよう。それ故、同一人物―今は法蔵の場合―に於てその教判の扱いが相違するということは、全仏教、就中、始教と終教とに対する彼の態度に何らかの変化が生じたと見ることもできる。法蔵に於けるその相違は『解深密経』などの三時教[3]の扱いや空不空と不成仏成仏の問題に見られるのである。

そこでこの小論では『五教章』「分教開宗」及び『探玄記』「立教差別」に見られる始教と終教との所説を尋ねて、その相違が奈辺より生じたのかということについて若干の考察を加えることにする。

一

五教は一般に㈠小乗教(愚法二乗のために四諦十二因縁を説く『阿含経』などの教)、㈡大乗始教(一切諸法は空であると説く『般若経』などの教と、諸法の性相を区別しなおかつ五性各別を説く『解深密経』などの教。前者は空始教と呼ばれ、後者は相始教と呼ばれる)、㈢大乗終教(真如随縁及び如来蔵縁起を説き、一切皆成仏を説く『楞伽経』や『起信論』などの教)、㈣頓教(言説によらず、段階的位次を超えて理性の頓顕を表現する『維摩経』などの教)、㈤円教(完全で円満な教。法界縁起を説く別教一乗たる『華厳経』の教)と解釈される。五教のうち中間の三教は三乗教であり、『法華経』は一乗教ではあるが同教一乗の分斉にあたる。これらの中、時代的背景もあって法蔵が特に苦心した教理組織は唯識

法相教学を中心とした始教と如来蔵思想を中心とした終教との関係であると見ることができる。特に縁起論という立場からみても、唯心縁起の法門である華厳教学は阿頼耶識縁起及び如来蔵縁起と重要な関係にあるといえる。このような点に於ても、華厳教学の中核を形成するものはここにあるといっても過言ではなかろう。

以上のことを踏まえつつ、まず『五教章』「分教開宗」に於ける始教と終教とに関する論述を見ることにする。法蔵は三乗教を『楞伽経』[4]や『大宝積経論』[5]の教説によって漸教と頓教とに分け、その中の漸教を更に始終二教に開くとして次のように述べている。

謂於三漸中一開三出始終二教一。即如三上（説）深密経等三法輪中後二一是也。依三是義一故、法鼓経中以三空門一為レ始、以三不空門一為レ終。故彼経云、迦葉白レ仏言、諸摩訶衍経多説三空義一。仏告三迦葉一、一切空経是有余説。唯有三此経一是無上説非三有余説一。……若有三衆生一、懈怠犯戒不三懃随順一捨三如来蔵常住妙典一、好楽修三学種種空経一。乃至広説。解云、此則約三空理有余一名為三始教一、約三如来蔵常住無上〈妙典〉一名為三終教一。[6]

始終二教に意味づけを与えるにあたって、法蔵は『法鼓経』の所説によって「空門」を始教に、「不空門」を終教に配当している。『法鼓経』[7]では諸の大乗経典には空義を説く経典が多いが、それらの空経はすべて有余の説に相当し、ただこの経が有余の説にあらざる無上の説であるとする。また多くの衆生の中でも懈怠犯戒の劣機の者は、如来蔵常住の妙典を捨離して自ら好んで種々なる空経の所説を修学するというのである。これらの所説を根拠として法蔵は有余の説たる空経の教説を始教とし、無上の説たる如来蔵常住の教説を終教と位置づけている。この後、法蔵は『起信論』の「離言真如」「依言真如」[8]の所説により頓漸二教や始終二教について次のように述べている。

又〔如〕起信論中、約三頓教門一顕三絶言真如一。約三漸教門一説三依言真如一。就三依言中一約三始終二教一、説三空不空二真如一也。[9]

『起信論』の所説のうち絶言真如（＝離言真如）は頓教門であり、依言真如は漸教門である。依言真如に関して空真如を説くのが始教、不空真如を説くのが終教なのである。また前出の引文の中で漸教を始終二教に開くとき、法蔵は『解深密経』などの教説にある第二照法輪を始教に、第三持法輪を終教に配している。「分教開宗」に先立って古今の諸師十家の教判[10]が載録されているが、その

中に玄奘の三種教判が紹介されている。これは『解深密経』『金光明経』『瑜伽論』を所依とした三時教判である。法蔵はこの転法輪（初時）・照法輪（中時）・持法輪（後時）の所説を承けて、「分教開宗」に於て始終二教の問題を取り扱ったといえるのである。第一時の転法輪たる小乗教についてはそれほど問題はないが、では第二照法輪と第三持法輪とに関して法蔵は如何なる解説を施しているのであろうか。「叙古今立教」には次のように述べている。

二名二照法輪一。謂〔於〕中時於二大乗内一密意説言二諸法空一等。三名二持法輪一。謂於二後時一於二大乗中一顕了意説二三性及真如不空理一等。[11]

玄奘の教判では第二照法輪は仏の説法のうち中時に於ける諸法皆空の教であり、これはあくまでも密意の説なのである。第三持法輪は後時に於ける三性及び真如不空理を説く教で顕了の説であるとする。すなわち、第三時たる唯識の教が了義の説となる。さて先に見た「分教開宗」では第三時教が終教に配されていることによれば、真如不空のみならず唯識三性説も終教に入るようにも思われる。しかし、法蔵は真如不空を説く点に注目して終教に配していると考えられる。

そして始終二教の空不空の問題に関しては、『五教章』「決択前後意」に於ても

三或有二衆生一、於二此世中一於二小乗及初教一根不定故堪下入二終教一即便定上者、則初時見レ転二小乗法輪一、中時見レ転二空教法輪一、後時見レ転二不空法輪一。如二解深密経等説一者是。[12]

とあるのを見る。現世で小乗及び始教に於て根が不定であり、更に進入して終教を受けるに堪える者は、仏が初時に小乗の法を、中時に空門を、後時に不空の法門を説くと見るというのである。これが『解深密経』などの所説であり、ここでも法蔵は同じく空教の法輪を始教に、不空の法輪を終教にあてている。

このように『五教章』に於ては始教と終教とが空不空の問題によって判別され、『解深密経』などによる三時教判のうち第二時教は始教に、第三時教は終教に配当されているのである。特に唯識の教である第三時教を終教に配した法蔵の所説が、先に挙げた五教の一般的な解釈にみる始終二教と直ちに一致するものでないことには一応注意を払わなければならない。

それでは法蔵の教学の中でも『五教章』同様、重要な位置を占める一方の『探玄記』に於ては、始終二教に関

してどのような解釈がなされているのであろうか。「立教差別・以義分教」には

二始教者、以四深密経中第二第三時教同許三定性二乗俱不二成仏一故、今合レ之総為二一教一。此既未レ尽二大乗法理一。是故立為二大乗始教一。三終教者、定性二乗無性闡提悉当二成仏一、方尽二大乗至極一之説、立為二終教一。[13]

と述べられている。始教とは定性二乗が俱に成仏しないことを許す教であり、『解深密経』の第二照法輪・第三持法輪はともに始教に該当するのである。一方、終教とは定性二乗及び無性闡提もすべてが成仏するという一切皆成仏を説く教である。この点に於て始教は「未だ大乗の法理を尽さざる」教説であり、終教は「方に大乗の至極を尽くすの説」なのである。そして始教の解説の中にある「今は之を合して総じて一教と為す」という表現は、暗に『五教章』に於て第二時教と第三時教とを始終二教に分けたことを承けて述べられているとも考えられる。いずれにしても『探玄記』の所説では、始教と終教とが定性二乗・無性闡提の不成仏成仏の問題によって峻別され、『解深密経』の第二・第三時教がともに始教に配当されているのである。

ここで始終二教について『五教章』と『探玄記』との所説の相違を確認すれば、『五教章』では空不空の問題によって、『探玄記』では定性二乗・無性闡提の不成仏成仏の問題によって二教が分かたれたのである。更には『解深密経』所説の第二・第三時教の扱いに関しては、『五教章』では第二時教は始教に第三時教は終教に配しているのに対して、『探玄記』に於ては第二・第三時教をともに始教に配しているのである。

二

前節で見たように始終二教と『解深密経』の三時教判とは密接な関係にある。中でも第二時教と第三時教は『五教章』と『探玄記』に於てはその取り扱いが違ってきている。そこで今は『五教章』『探玄記』両書に於て、法蔵が三時教判をどのように評価しているのかについて見ていくことにする。

まず『五教章』「叙古今立教」に於て法蔵は玄奘の三種教判、すなわち三時教判を紹介した後で次のように述べている。

此三法輪中但摂〈説〉二小乗及三乗中始終二教一、不レ摂二別教一乗一。何以故。(以)華厳経在二初時一説、非二是小乗一故。彼持法輪在二後時一説、非二是華厳一故。

是故不レ摂二華厳法門一也[14]。

転（初時）・照（中時）・持（後時）の三法輪は、ただ小乗と三乗中の始終二教とを摂するのみで別教一乗たる華厳の法門を摂していないとする。『華厳経』は仏成道菩提樹下の説法であり、小乗教が説かれる以前の教である。それ故、『華厳経』こそが初時の説なのである。しかし今の三時教に従えば、初時は転法輪たる小乗教となり、この中に『華厳経』を摂することはできない。更に『華厳経』は第三時に説かれた教でもないのであるから自ずと持法輪にも摂せられない。つまり別教一乗の法門たる『華厳経』は三時教判のいずれにも摂せられないのである。この点を指して先学は三時教判に「摂教未尽の失」ありとし[15]、唯識法相教学にいう「年月の三時」[16]を批難したものと解釈するのである。

それでは唯識法相教学に於ける三時教判の見解はどのようであろうか。基の『法苑義林章』巻一には

略示レ教者、四阿笈摩等是初時教。諸説空経是第二時教、以二隠密言一総説二諸法無自性一故。花厳深密唯識教等第三時也、以二顕了言一説二三無性非空非有中道教一故。[17]

とある。『阿含経』などの小乗教は初時有教、隠密の言を以て諸法の空を説く『般若経』などは第二空教、顕了の言を以て三無性非空非有の中道を説くのが第三時中道教である。『華厳経』『解深密経』『唯識論』などの教は第三時中道教にあたるのである。この『法苑義林章』の所説に於ては明らかに『華厳経』を第三時教の中に摂している。この点では所謂三時教判はただ単に年月の前後によったものではないといえる。一般に唯識法相教学に於ては慧沼（六五〇～七一四）によって「年月の三時」と「義類の三時」とが明確にされたとみるが[18]、『法苑義林章』の所説に於ては「年月の三時」の中に「義類の三時」を内包しているとみることができる[19]。このような『法苑義林章』の主張を熟知していればこそ、法蔵は「華厳経は初時に在るの説」と述べた後、更に改めて「彼の持法輪は後時に在るの説、是れ華厳に非ざるが故に」と述べたのではなかろうか。しかし『五教章』「叙古今立教」の結びでは玄奘をも含めた諸師十家の徳を讃えているのを見る[20]。そして玄奘の教判に関してもやや批判的とも思える態度を取りつつも、法蔵は自らの教判の上に三時教判の所説を受け入れるという姿勢を取っている。これも『五教章』に見られる融会の態度の一であるといえよう。

次に『探玄記』に於てはどうであろうか。法蔵は「立

教差別」の中で日照三蔵より伝え聞いた戒賢・智光の三時教判を紹介した後、衆生が教説を領解するのに約して戒賢・智光の教判を会通しようとして次のように述べている。

二約二機領一教者、問。二説三教各初説レ小、華厳初説如何会釈。答。諸徳三釈。

一云、此三法輪約二漸悟機一説、華厳最初約二頓悟機一説。若爾密迹力士経初時具説二三乗法一、此為レ属レ漸為レ属レ頓耶。若是漸教応二唯説一レ小、若是頓教応二唯説一レ大。彼既具レ三極成二違害一。是故此釈亦難レ用也。[21]

まず戒賢の主張するところは『解深密経』や『瑜伽論』などによって初時教は小乗の法を説く『阿含経』などの教、第二時教は諸法は空なりと説く『般若経』などの教、第三時教は三性三無性などの唯識の二諦を説く『解深密経』の教であるとする。この戒賢の三時教判は『五教章』所説の玄奘の三種教判と同じ内容と考えられる。一方、智光は初時教は心境ともに実在すると説く心境倶有の小乗教、第二時教は心のみ有と説く境空心有の法相大乗、第三時教は心境倶空の無相大乗であると主張する。そして両者はそれぞれ第三時教、すなわち戒賢は唯識の教、智光は般若空の教をもって了義となすのである。そこで法蔵はこの二説はいずれも初時に小乗教を説くとするが、初時の説たる『華厳経』の問題をどのように会釈するのかという問を設けることになる。これに対して法蔵は三釈[22]を出している。その第一釈がこの三法輪は漸悟の機に約して説き、『華厳経』の最初なることは頓悟の機に約して説くというものなのである。しかし法蔵は「此の釈も亦、用い難きなり」として批判の眼を向けている。何故かといえば、『密迹力士経』の「初時に具さに三乗の法を説く[23]」という教説に関して、これを漸教となせば小乗の法のみを説くべきであり、頓教となせば大乗の法のみを説くべきであるとする。しかし『密迹力士経』では既に初時に三乗の法を具足しているのであるから、今の諸徳の釈は教説に極めて違害することになる。この諸徳の釈というのは『法苑義林章』巻一の

約二理及機漸入レ道者、大由レ小起、乃有二三時諸教前後一。解深密経説二唯識一是也。若非二漸次一而入レ道者、大不レ由レ小、即無二三時諸教前後一。約二其多分一即初成道花厳等中説二唯心一是。[24]

という一節を想起させるものである。

また法蔵は戒賢・智光二師の教判それぞれに対して『華厳経』を摂していない点を批判しているようである。

しかし戒賢・智光の教判を述べる中に於て、法蔵は戒賢の説について「戒賢の所判、亦道理有り」[25]とし、智光の説については「智光の所判、甚だ道理有り」[26]としている。このような点から見れば、法蔵は智光の教判の方を評価しているように思われる。[27]

以上見てきたように唯識法相教学にいう三時教判に対する『探玄記』の見解は、『五教章』に見られるそれよりもいささか批判的になっていると考えられるのである。

三

それでは始終二教に対する『五教章』と『探玄記』との所説の相違をどのように考えるべきなのであろうか。この点に関する一つの見方としては、寿霊の『五教章指事記』の解釈が挙げられる。寿霊は始終二教の問題に対して「成仏不成仏門」と「空不空門」という義門の相違があるとして

問。経疏云、解深密経以為二始教一。云何今説為二終教一耶。答。義門不レ同。若約二成仏不成仏門一者、解深密以為二始教一。以レ許二定性入二実滅一故。若約二空不空門一以名二終教一。明二不空一故。義望不レ同、故不二相違一。[28]

と述べている。『経疏』、すなわち『探玄記』に於ては『解深密経』を始教と見なしているのに、『五教章』ではなぜ終教に配当しているのかという問を出すのである。この答としては義門の相違があるからであると述べている。『探玄記』では「成仏不成仏門」によって『解深密経』を始教と判定するのであるが、それは定性二乗の証する涅槃に入ることを許し、いまだ皆成仏すると説かないからなのである。一方、『五教章』に於ては「空不空門」によって始終二教を判別し、第三時教である『解深密経』は不空をも明す点で終教として位置づけられるのである。

このような義門の相違という寿霊の指摘はまさにその通りである。しかし、『五教章』『探玄記』両書の所説は、ただ単に義門の相違という問題に止まらない何らかの意義があるのではなかろうか。この場合には以下のような四の観点を想定することができると思われる。すなわち、一に五教の分類方法、二に両書がもつ時代背景、三に日照三蔵との出遇い、四に両書の撰述に関する意図の四である。

一に五教の分類方法に関しては、『五教章』には

就レ法分レ教、教類有レ五。[29]

とあり、『探玄記』には

以レ義分レ教、教類有レ五。此就レ義分、非レ約二時事一。[30]

とある。ここで注意しなければならないのは、『五教章』の「法に就く」ということであり、『探玄記』の「義を以て」ということである。例えば、『五教章』では五教判の末尾に

此約レ理〈法〉以分レ教耳。若就二法義一如二下〔巻中〕別弁一。[31]

と述べて、所謂所詮の義たる法相義理の問題を「所詮差別」に譲っているのである。そうすれば、『五教章』にある「法に就く」という「法」は文章や教法などの能詮の法を意味していると見ることができる。[32] しかし内容的に見れば、『五教章』所説の五教判に於ては今の「法」を能詮の法とのみ理解することはできないかも知れない。ただ『五教章』「分教開宗」に於ては、漸頓二教に関して『楞伽経』[33]や『大宝積経論』[34]の所説を引用し解説をなしている。その結果として『五教章』に於ける五教判は、漸頓というような化儀の面、いわば説法の形式的・段階的な面をも有していると見ることができるのではなかろうか。ここに於て『解深密経』の三時教のうち、第二時教を始教に、第三時教を終教に配当したと見ることもできよう。

一方、『探玄記』に於てはあくまでも「義を以て」とあるように、教の意義内容たる所詮の義をもって五教に分けている。これを強調しているのが「時事に約すには非ず」という言葉であり、時間的な順序や事儀に約するのではないのである。この言葉は『五教章』にはなく、これが『解深密経』の第二時教と第三時教とを合して始教一教に配当したことにつながると思われる。

更に法蔵の五教判で特徴的なことは、『探玄記』の五教判の結びに

此上五教非二局判レ経、但多分而論。如二上所レ指通二諸経論一、並可レ知。[35]

と述べていることである。これは一経を局って一教となすのではなく、一経・一論に説かれる多分の説によって五教のいずれかに分類するというものである。このような考え方は『五教章』にも共通していると思われ、特に『五教章』の「所詮差別・断惑分斉」の始終二教の所説の中には顕著に現われているようである。[36]

二に両書がもつ時代背景については、まずその撰述年代の確定が必要となる。撰述年代に関してはいずれも推定の域を出ないが、『五教章』は日照三蔵との出遇いによる記述をしていない点などにより三十八歳以前と考え

られ、[37]『探玄記』は日照三蔵をはじめとした訳経三蔵の記事などの点より五十代中頃と考えられる。[38] もちろん『探玄記』は大部な著であるから比較的長期間にわたって著されたと思われる。[39] いずれにしても、この両書の間には十年ぐらいの年月の隔たりがあることは確実であろう。『五教章』が著された時には玄奘の愛弟子である基（六八二没）が存命であった可能性が強く、いまだ唯識法相教学が全盛の時代であったと思われる。『五教章』の「叙古今立教」に玄奘の教判を取り挙げていることも当時の仏教界の情況を考慮してのことといえよう。一方、『探玄記』が著された頃には唯識法相教学に於ては慧沼がその跡を継承していたであろうが、基在世当時ほどのまとまりと勢いがあったとは言い難いのではなかろうか。

三には日照三蔵との出遇いの問題である。法蔵と日照三蔵との出遇いの話はひじょうに有名であり、法蔵は日照三蔵より多くの教示を受けている。中でも戒賢・智光の三時教判の問題は法蔵の関心を強く引いたといえる。このことは『五教章』以後の法蔵の著作の中に必ずといってもよいほど紹介されている。先にもふれたが、『探玄記』に於ては戒賢・智光の教判に関して智光の教判―第二時教は法相大乗、第三時教は了義たる無相大乗、すなわち『解深密経』の三時教判のうち第二時教と第三時教の地位を逆転することになったもの―を評価していたように考えられる。

四に両書の撰述に関する意図についてである。『五教章』は五教の分斉を明らかにすることによって「華厳一乗」の教義を闡明した書である。『探玄記』は華厳学派正依の経典である『華厳経』そのものを対象としてその注釈をなした書である。つまり、『五教章』は教義の綱要書としての性格を有し、『探玄記』は経典の注釈書という性格を有しているのである。そこに自ずから両書の立場の違いがあるといえる。

以上、述べたような諸点を無視しては始終二教の説相の相違という問題も明らかにならないのではないかと思われる。

結び に

『五教章』は唯識法相教学を受け入れるために大きな努力を払いつつ、それを仏教の流れ全体の中で矛盾なく理解しようとする立場に立っている。特に「所詮差別」の各門に於ては、始終二教の所説が大半を占めていることからもそれが窺えるのである。そして「義理分斉・三

性同異義」では、所謂「真如凝然」の問題を「諸法を作さざる如情所謂の凝然なりと謂うには非ず」[40]と解釈して『成唯識論』[41]に代表される教説を会通している。更に清弁・護法の空有の諍論に関しても「相破返〈反〉相成」[42]と述べて、お互いの観点の相違にふれながらそれぞれの主張を認めるのである。その上、「三性同異義」は唯識教学に於ける重要な教義の一である三性説を独自の立場より変容せしめて自らの華厳教学の上に取り込むのである。また五教十宗判の十宗は基の『法華玄賛』所説の八宗判[43]によっていることなども周知の通りである。このような点が『五教章』の特徴の一であり、それが『五教章』に於ける始終二教の取り扱いにも反映していると考えられる。

一方、『探玄記』では唯識法相教学に対して『五教章』ほどの融会の態度を取ってはいないようである。これには唯識法相教学がそれの全盛期を過ぎたという事情もあるかも知れない。更には『五教章』撰述段階ではいまだ出遇っていないと思われる日照三蔵直伝の戒賢・智光の三時教判に対して、どちらかといえば智光の教判に心を動かされたということも影響していないであろうか。そして『五教章』が教義の綱要書としての性格を有しているのに対して、『探玄記』は『華厳経』という経典そのものの注釈書なのである。このような背景のもとに、『探玄記』では所詮の義の観点に立ち成仏不成仏の問題―成仏するか否かという仏教に於ける重要な課題―によって始終二教を明確に判別し、『解深密経』の第二・第三時教を始教一教に位置づけたと見ることもできよう。

以上のようにこの小論では『五教章』「分教開宗」と『探玄記』「立教差別」とに於ける始終二教の相違をめぐって、その一端を考察したのであるが、決定的な結論を見出すことは難しいように思われる。しかしこの始終二教の問題は法蔵教学が担った重要な課題を孕んでいることは確実である。

註

① 題号には以下の八種がある。一、華厳一乗教義分斉章（宋本、浄源重校序）二、華厳一乗教分記（和本上・中巻、錬本上・下巻）三、華厳経中一乗五教分斉義（和本下巻）四、華厳経中一乗立教分斉義記（錬本中巻）五、一乗教分記（寄海東書）六、華厳教分記（華厳経伝記、法蔵和尚伝には教分記とある）七、華厳五教章（浄源重校序）八、華厳一乗分教記（同前）である。

② 中條道昭「智儼の教判説について」（駒沢大学仏教学部論集第九号、昭53）二五八頁・二五九頁註13参照。

③ 『解深密経』巻第二、無自性相品（大正16・六九七a～

b）に三時教の所説がある。また「転法輪・照法輪・持法輪」の三法輪は『合部金光明経』巻第二、業障滅品（大正16・三六八b）にある。

④　四巻『楞伽経』巻第一、一切仏語心品にある「仏告二大慧一、漸浄非レ頓。如二菴羅果漸熟非レ頓、如来浄二除一切衆生自心現流一、亦復如レ是。漸浄非レ頓」（大正16・四八五c～六a）や「譬如二明鏡頓現二一切無相色像一、如来浄二除一切衆生自心現流一、亦復如レ是。頓現下無相無レ有二所有一清浄境界上」（同・四八六a）という経文、或いは十巻『楞伽経』の相当箇処では巻第二、集一切仏法品（同・五二五a、五二五b）の経文を引用。

⑤　『大宝積経論』巻第一にある「諸頓説教及諸脩多羅法」（大正26・二〇八c）を引用。

⑥　鎌田本一四二～三頁。大正45・四八一b～c。

尚、『五教章』のテキストには、和本、宋本、錬本の三種があり、『大正大蔵経』所収の宋本はテキストとしては列門の異なりや文句の異なりなどの点に於て問題があることが知られている。今は用いやすさの面からも和本・宋本の異同を示した鎌田茂雄著『華厳五教章』（仏典講座28、大蔵出版、昭54）をテキストとして使用し、鎌田本と略称して用いることにした。引用文中に示す標識中、〔　〕は和本にあって宋本にはないもの、（　）は宋本にあって和本にはないもの、＜　＞は和本に対する宋本の異読（例・菩提留＜流＞支）を表わすものである（ただし、即＝則の類は校異省略）。便宜上、『大正大蔵経』の該当箇処も併記した。

⑦　『大法鼓経』巻下に「迦葉白レ仏言、世尊、諸摩訶衍経多説二空義一。仏告二迦葉一、一切空経是有余説。唯有二此経一是無上説、非二有余説一。復次迦葉、如下波斯匿王、常十一月設二大施会一、先食二餓鬼孤独貧乞一、次施二沙門及婆羅門一、甘饍衆味随中其所欲上、諸仏世尊亦復如レ是。随二順衆生種種欲楽一、而為演二説種種経法一。若有二衆生一、懈怠犯戒不二勤修習一捨二如来蔵常住妙典一、好楽修二学種種空経一」（大正9・二九六b）とある。

⑧　大正32・五七六a。

⑨　鎌田本一四三頁。大正45・四八一c。

⑩　菩提流支（一音教）、誕法師（漸頓二教）、光統慧光（三種教）、大衍法師（四宗教）、護身法師（五種教）、耆闍法師（六宗教）、慧思・智顗（四教）、敏法師（二教）、光宅法雲（四乗教）、玄奘（三種教）の十家である。

⑪　鎌田本一三三頁。大正45・四八一a。

⑫　鎌田本一七七～八頁。大正45・四八三a～b。

⑬　巻第一（大正35・一一五c）。

⑭　鎌田本一三三頁。大正45・四八一a。

⑮　一蓮院秀存述『華厳五教章講義』巻二に「爾ればこの彼家に立る三時は摂教未尽の失は免れぬと云う心を含めてのたもうなり」（九九丁ウラ）とある。尚、『探玄記』巻第一には一連の三時教判をめぐっての釈の中に「摂レ法不レ尽」（大正35・一一二b）という言葉がある。

⑯　『成唯識論述記』巻第一本に「漸教法門以弁二三時一。若大由レ小起、即有二三時年月前後一」（大正43・二三〇a）とあり、『法苑義林章』巻第一（大正45・二四九b）にも同様

の説がある。

⑰ 大正45・二四九a。

⑱『成唯識論了義灯』巻第一本には三時教について「此有二義。一約二前後一、二約二義類一」（大正43・六六〇c）とある。

⑲ 深浦正文著『唯識学研究』下巻、教義論（永田文昌堂、昭51）に「而して、これもと経説の年月の三時におのずから義類の三時を含蓄せるに基けるものである」（一一一頁）と述べられている。

⑳「叙古今立教」の結びの中には「此上十家立教諸徳並是当時法将、英悟絶倫歴代明模。階位叵レ測」（鎌田本一三四頁、大正45・四八一a）とある。

㉑ 巻第一（大正35・一一二b）。

㉒ 他の二釈は、三法輪は顕了門に約す釈と結集に約す釈との二である。

㉓『大宝積経』巻第十一～二、密迹金剛力士会に「菩薩適成二如来道法一、夙夜七日悉存二法楽一、……如レ是寂意、如来以レ斯随二衆生心所レ可二愛楽一、而転二法輪一、各令レ得レ所。如来以レ是為二衆生講一転二于法輪一」（大正11・六四c～五c）とある取意文。

㉔ 大正45・二四九b。尚、『成唯識論述記』巻第一本（大正43・二三〇a）にも同様の説がある。

㉕ 大正35・一一二b。

㉖ 同右。

㉗ 国訳一切経・経疏部六（坂本幸男訳『華厳経探玄記』一）、四六頁註73の中に「賢首は明白には云わざれど戒賢の教判に対しては『亦道理有り』といい、智光のに対しては『甚だ道理有り』といえるに徴して智光の教判に一層の価値を認めしこと推知せらる」との指摘がある。

㉘ 大正72・二二三a。

㉙ 鎌田本一三六頁。大正45・四八一b。

㉚ 巻第一（大正35・一一五c）。

㉛ 鎌田本一四三頁。大正45・四八一c。

㉜ 凝然の『五教章通路記』巻第十四（大正72・三九二a～c）によれば、「就レ法分レ教」の「法」の解釈について、宋朝四家の疏のうち『義苑疏』『復古記』『集成記』は能詮の教法と捉え、『折薪記』は所詮の義と捉えている。そして凝然は「就レ法分レ教法通二能所一。是故諸記異釈取捨」（大正72・三九二c）と述べて、今の「法」は能詮所詮に通ずると解釈している。

㉝ 前出④参照。

㉞ 前出⑤参照。

㉟ 巻第一（大正35・一一六b）。

㊱ 始教の断惑分斉を明す中では、梁『摂論』（真諦訳『摂大乗論』及び同『釈論』―主に終教の教説として引用される）や『維摩経』を引用し、終教では無性『摂大乗論釈』（主に始教の教説として引用される）や『仁王経』を引用している。

㊲ 国訳一切経・諸宗部四、三五頁「華厳五教章解題」（鎌田茂雄述）を参照。

㊳ 吉津宜英「法蔵の著作の撰述年代について」（駒沢大学仏教学部論集第十号、昭54）を参照。

㊴ 国訳一切経・経疏部十、五三〇頁「華厳経探玄記解題」（鍵主良敬述）を参照。

㊵ 鎌田本二一四頁。大正45・五〇〇a。

㊶ 「真如凝然」という言葉は、『成唯識論』巻第九の「真謂真実顕レ非ニ虚妄一。如謂如常表レ無ニ変易一。謂此真実於ニ一切位一常如其性故曰ニ真如一。即是湛然不ニ虚妄一義」（大正31・四八a）や同巻第十の「一本来自性清浄涅槃。謂一切法相真如理。雖レ有ニ客染一而本性浄。具ニ無数量微妙功徳一、無レ生無レ滅湛若ニ虚空一」（同・五五b）の所説によったものと考えられる。

㊷ 鎌田本二一七頁。大正45・五〇一a～b。

㊸ 巻第一本には「宗有レ八者、一我法俱有、犢子部等。二有法無我、薩婆多等。三法無去来、大衆部等。四現通仮実、説仮部等。五俗妄真実、説出世部等。六諸法但名、説一部等。七勝義皆空、般若等経、竜樹等説中百論等。八応理円実、此法華等無著等説中道教也」（大正34・六五七a～b）とある。